

# 矢内原忠雄の留學生活

福田 秀一

一

用する。

本紀要第二七号(二〇〇一・三、實際は同年八月刊)の「矢内原忠雄の留學日記」(以下「前稿」と呼ぶ)に続けて、主としてその二年目の記事から、いくつか注意すべきものを拾ってみる。なお、前稿の首尾に予告した河合栄治郎の留學日記については、紙数の都合で他の機会に譲る。

留學中の矢内原は、音楽会や劇場・美術館などにもよく行っている。留學第一年のロンドンでナショナル・ギャラリーやテート・ギャラリー、大英博物館その他を訪ねたことは、前稿に年譜式に示したが、そのような方面の話題としては、翌大正十年にも次のようなものがある(カギ括弧で囲んだ引用は、原語の綴りを含めて原文のままだが、誤植・誤記と思われるものは訂し、その一部は注に断つた)。初めに年譜式に掲げ、その中のいくつかについてはその後

1	「Albert Hall 及び Handel の “Messiah” の奏樂を聞く。」
12	Opera “Beggars” <sup>(1)</sup>
20	“Alice in Wonderland” (パレーカ)
21	「Court Theatre 及び Shakespeare の Midsummer Night’s Dream を見る」(前稿に指摘したが、1・17に本文を読んでいる)
11・5	「Albert Hall 及び Royal Choral Society の Concert “Samson and Delilah” (Saint-Saens) を聞く」 <sup>(2)</sup>
9	「Aldwych Theatre 及び Shakespeare の Tempest を見る」
16	「National Blind Institute に行き、(中略) 田中耕太郎らと盲人の organ 及 piano recital を」聞く(作曲も

(1)

- 盲人)
- 18 「活動写真を見て笑ふ」(題名・劇場不記)
- 26 「Queen's Hall について Symphony Orchestra を聞く」(曲名・演奏者不明)
- 28 「Aldwych Theatre について Tempest を見る」
- 三・1 「Mrs Tussaud's Exhibition を見る」
- 5 「Albert Hall について At the Abbey's Gate 及 Dream of Gerontius の Concert を聞く」
- 7 「活動写真を見る」(題名・劇場不記)
- 16 芝居 “League of Nations” (New Oxford Theatre)
- 18 「British Museum 内 Edward VII Gallery について “Recent Acquisition” 中 Forain の絵及 Bolshevik の painting を見る」
- 23 「Queen's Hall について London Choral Society の Beethoven 作 Mount of Olive 及び The Mass in D (注「荘嚴ミサ曲」) を聞く」
- 25 再び “Messiah” (Albert Hall)
- 31 「Palace Theatre について “Dawn of the World” と題する Old Testament Story の活動写真を見る。Creation より Moses の死迄なり」(後文参照)
- 四・9 「City Temple について Händel's Judas Maccabaeus を聞く」
- 15 「Aldwych Theatre について “Olivia” を見る。“The Vicar of Wakefield” に基ける play (後略)」<sup>(5)</sup>
- 23 「Albert Hall について “Hiawatha” の music を聞く」<sup>(6)</sup>
- 28 「Aeolian Hall について London String Quartet の Beethoven 演奏を聞く」(曲名不記)
- 五・14 「Court Theatre について “Othello” を見る」(ヴェルディのオペラではなく、原作の劇の方である)
- 28 「Miss Carrie Tubb の wonderful soprano を聞く」(Coliseum = 大演技場)
- 六・1 「Chu Chin Chow」(His Majesty's Theatre, 中国人の何かのショーか。五年目二二〇〇回のロングランに「好奇心を感じた」)
- 18 「Queen's Hall について Moisewitsch といふ名前の前の人の Chopin recital (pianoforte) を聞く。」<sup>(7)</sup>
- 21 「午後 Tate Gallery. 六時より Westminster Abbey について 仏国人 Joseph Bonnet 氏の Organ Recital を聞く。Bach の Fantasia and Fugue in G minor 最も面白からき」
- 24 British Museum, National Gallery
- 七・6 「Strand Theatre について “Safety Match” (注「劇か) を見る」
- 11 National Gallery (「Michelangelo の初期の作

- Entombmentに興味を感ず」とある)
- 八・九 (Edinburghにて) City Museum など
- 12 (同右) 「Royal Scottish Academyの陳列を見る」
- 19 (Grassmere およびそれへの途にて) Wordsworthの旧居を訪ねる
- 24 (Rugbyにて) Tom Brownの作者 Thomas Hughesの遺跡・墓等を訪う
- 九・七 (既にロンドンに戻り) 「Coliseum (注、前出のColiseumのことか) に入り、Spainの gypsy dance 及 singing」を見る
- 17 (既にベルリンに移り) 「National Galerieを見る」<sup>(8)</sup>
- 20 「Friedrich Wilhelm Museum」を見る<sup>(9)</sup>
- 十・31 「K. Friedrich Museum」(Kは Kaiser)
- 十一・7 「Staats Operhausの昼のKonzert」<sup>(10)</sup>
- 10 「National Galerieの近代画の陳列を見る。」(後略)
- 16 Altes Museum<sup>(11)</sup>
- 23 Mignon (Deutsches Operhaus)<sup>(12)</sup>

念のために言えば、七月初めまでと九月初めとはロンドン、八月は前稿にも短くふれたウェールズ・スコットランド旅行、九月半ば以後はベルリンでの体験である。

留学時代の日記は右の二年目までしかなく、以後のベルリンその

他での見聞はほとんど知り得ないが、これだけで見ると、極端に芝居好きな穂積重遠(注3所掲拙稿参照)や美術が専門に近かった阿部次郎<sup>(13)</sup>には及ばないが、大英博物館などで勉学に精励する一方で、演劇・オペラや音楽会また美術館・博物館に、かなりまめに足を運んでいることが知られる。これについては後年の回想「私の歩んできた道」(大塚久雄のインタビューに答えたもの、『全集』第二十六卷)にも、「できるだけ視野を広くし、まあ今の言葉では教養を積む」ことを心がけ、音楽・美術・思想等々に目を向けた、という趣旨のことを語っている<sup>(14)</sup>。また、主にプログラム(時に新聞)によつたのであろうが、日本ではそれほど馴染みでなかった作曲家や曲名、その調なども、綴りまで正確に記録しているのに感服する。

二

ところでこれらの中に、矢内原の感想を記したものがいくつもある。その第一は「オペラ“Beggars”」について(一・12)で、

“Times”に mention せられたるを以て見んとの好奇心を起したり  
 が見んか見ざらんかの戦はかなり永く心中につづけられぬ。見  
 て其の art はいざ知らず趣旨の immoral なるに驚きたり。

disgustful!

とあり、次いで “Alice in Wonderland” (一・20) についても、「美しき劇にて dance が主なり。Queen of Oyster 最もよく dance す」と、一旦その美しさ(筋あるいは特に舞台装置のか)は認めながら、続

けて

西洋の dance はどうも感心せず。彼等 (dancing girls) の体躯実には美はし、併し爪先にて踊つたり、足をむやみに高くあげたり、キリキリ廻つたりするのは (而してそれが最も主要なる部分なり) 真善美のいづれをも具備せず unnatural なり、no idea なり。その動作自体に何等の美的要素をそなへず、或点に於て日本の軽業に類似す、真の art といふを得ず。

と評しているが、この二箇所が彼の評価基準をよく示している。もう一つ引けば「活動写真」についての論 (三・七) で、

(前略) 午后活動写真を見る。余は活動写真を好む (芝居よりも)。西洋の風物、家族の模様、社会生活などを見ること其理由の一なり。現実性を離れ肉感に訴ふること少きこと其理由の二なるべし。但し決してたましひを elevate するものにあらず。

とあり、要するにたとえ趣味娯楽の分野であつても、いたずらに肉感的なものを退け、日常生活のすべてにおいて、魂を高め浄化するものを求めているのである。<sup>(15)</sup>

だから、オペラ「サムソンとデリラ」を見た際 (二・五) は、初めはプログラム無く「遺憾」であつたが「中入後」の Sanson in the prison of Gaza, 及び Banquet of Philistines の二場」は「文句を解するを得し為め」詳しく筋を追ひ、「余のたましひと身体と共に震ひわななくを覚え」たと言う。<sup>(16)</sup> そして、

聞け、Sanson」]れの愚かなりし事と罪とを悔ゆる声を Hebrew

prisoners の Chorus 淋しげに又恨めしげに Sanson が神と己等とを betray せるを責むるに對し彼れ Sanson 断腸の思ひあり。

以下、要点を詳しく述べ、

彼れ Sanson Nazarite <sup>(17)</sup> にてあり乍ら一婦人 (注、デリラ) の愛に引かれて力の secret を打明け敵に捕へられ両眼を穿たれ獄に引かれ敵の宴会のなぐさみ物とせられ己と己の神との罵詈嘲弄を被る。彼れ愚かなりき、彼れ罪を犯したりき。しかも彼れ悔改めたり、彼は己の愚により敵と共に身を滅したり、然れどもエホバの御名の恥を雪ぎ其御栄を顕揚せずしては世を去る能はざりき、神は Sanson の過ちを許し之に聞き給へり。(次に一段落略)

Sanson は神を信じて柱を揺りたり。強き Sanson は Delilah の愛に溺れて弱くなり、弱き Sanson は罪の悔改と信仰とによりて従前にもまされる強き者となりぬ。(中略) 誰か弱き Sanson に対し一掬同情の涙なからんや、余は実に彼の為めに涙を拭ひたりき、余自身弱き者なればなり。―然れども之れ人情なり、我らは神の standard に高められざるべからず、Sanson が信仰によりて其力を恢復し前にもすぐれたる勇者となりしを思ひここに devine instruction を受けざるべからず。(後略)

と、長文 (全集で二頁分) の感想を記している。

尤も、「テンペスト」はその前に見た「真夏の夜の夢」と比較して純粹に作風の印象を記している (二・九) し、「オセロ」についても

Shakespeare の人の様々の性格を透徹してよく表はせるに感服す、(五・14)

と言ひ、一週間経つても

過日見たる“Othello”の印象忘れることが出来ない。真にすぐれたる作と思ふ。(同21)

とあるし、ナショナル・ギャラリーでは

大分陳列替ありて眼新しく感じぬ、名画はいくら見ても飽かぬ。(六・24)

またベルリンの「National Gallerieの近代画の陳列」でも

(前略) 立体派、未来派の画など変なれども何かしら新しき面白味あり。変なのは人間の形が妙に頭が長かつたりして昔の埃及の人形(博物館にて見る)の様な primitive な点が主で、面白味は動的の画、何かしら躍動して居る様な点にある。(十一・10)

と言つており、またオペラ「ミニョン」の感想(十二・23)は「面白くあつた」の一言で、その関心と評価基準が必ずしも禁欲的・宗教的なもののみではなかつたことも知られる。

また、ロンドンの末期に「時間をつぶすために」入つた Coliseum (?) で見た「Spain の gypsy dance 及 singing」について、「其音調、楽器、一般の調子が支那そつくりで亡国的であつた」(九・7)と書いており、ジプシー音楽の特徴は、よく掴んでいる。『全集』第二十八卷(日記)の月報に寄せた姪(妻愛子の姉の娘で、学生時代から結婚までの六年半、矢内原の家に寄寓)の藤井借子氏の「叔父の面

影」(前稿にも挙げた『矢内原忠雄—信仰・学問・生涯—』に再録)によると、矢内原は歌う方は、湯上がり以上に機嫌で歌う讚美歌などもすぐには「どの歌か分らぬ頗る付き(傍点原文)の音痴だったが、聞く方(注、そこで例に挙げられているのは留学時代に買って帰つたメサイアのレコード)は大へん好き」だったというのも思い合はされる。<sup>(18)</sup>

音楽・美術以外の話題で注意されるのは、文学関係の二つである。さきの年譜にも挙げたが、一つは湖畔地方の Grasmere で Wordsworth の旧居と墓を訪ねたとき(八・19)、もう一つは Rugby で Tom Brown's School Days の主人公のモデル Thomas Arnold (Matthew Arnold の父)のベッドや墓の前に立つたとき(八・23)の感想である。

前者では、初めその旧居の一つ「Rydal Mountを訪ひしも「No Admittance. This garden is not open to the public」といふ大きな揭示が門にかけてあつたので恐れをなして退却し」、午後別の「旧居 Dove Cottageを訪ふ」。そこでは「自筆の To The Cuckoo の MS (注、手稿)」に興を引かれたが、特に近くの教会の墓地にその「一族の質素なる墓を訪う」て、

現代の英人の多くは彼の詩を顧みず又之を解せずと雖も東洋日本に彼の同情者尠からざるを告げて彼の靈を慰めた。

とある。前半に言うところ(当時の英国における評価)の当否は知

らないが、矢内原自身は中学以来の英語教材や読書で親しんでいた  
のであろう。<sup>(19)</sup> 右に続く記事

帰途は本道を通り Rydal Water の岸にて Wordsworth の “favorite  
seat” に腰をおろして美しき湖の景を眺め Coleridge の旧居 Nab  
Cottage の前を過り Rydal より右折 Thomas Arnold の旧居 Fox  
How のある処を廻りて Ambleside に出で、より charabanc の  
便を得て Windermere に帰る。最も愉快な一日であつた。

も印象的である。因みに、この二日前（八・一七）にも湖畔地方遊覧  
の一環として Southey（注 Robert, 1774 - 1843）や Ruskin の遺跡  
を見学した記事（「shower に会ひぬれて帰る。しかし面白かつた」と  
ある）もよく筆が伸びており、この旅行で大いに心身を休めた様子  
が分かる。

Tom Brown についても（右の引用にもその作者の旧居に言及してい  
るが）、Rugby School の「old building, chapel 及教室」や「bed, 自習  
室等」を見た後、「chapel 内 Thomas Arnold の墓石の前に立ちたる時  
は胸が一杯になつた」と言ふ、

運動場を一巡し非常なる感慨を以て学校を出た。此世の fame は  
消え行くといふ。併し Arnold 先生の名は東海の遊士をこの処に  
attract しその胸の浪を異常に高めた。<sup>(20)</sup>（後略）

とあつて、その興奮が読者に伝わってくる。これに対して翌日訪ね  
た Stratford-on-Avon のシェークスピアの遺跡類は、「Shakespeare 通  
ならば定めし面白からんと思つた」と、あっさりしている。

### 三

矢内原のキリスト教に対する強い信仰と敬虔な生活態度は今まで  
の引用にも見られたが、日記の随所に横溢している。その典型を、  
留学第一年（大正九年）の大晦日の記事で示してみる。

（前略）夕方 St. Paul's Cathedral に入り行き service に列す、大伽  
藍の中に唱歌を聞き乍ら去り行く年を思ひて主の恵みを感謝せ  
り。帰宅後も静かに種々の事を思ひめぐらしたり。今年の大なる  
出来事は余の別子より大学に転じたること、光雄（注、次男）の  
出生、及留学なり。内的にも外的にも頗る意義深き一年なりき。  
余の為したるよき事（若し有らば）も悪しきことも凡て主イエス  
にゆだね奉り自己はただ恩恵のみを背負ひて心楽しく更に恵みの  
一年に入ること如何ばかりの感謝ぞ。妻子、兄弟、朋友、親戚凡  
てに主の恵みを祈りて静かなる眠りにつけり。

そして翌日すなわち大正十年一月一日の記も

恩恵の一年去りて又恩恵の一年来る。此年に起るべき凡ての歓  
楽、苦難、善行、失敗、悉く聖霊によりて潔められ、正しき主の  
導きにすぎりて更に信仰の一階を昇らしめられんことを祈る。殊  
に主が余を試誘に遇はせず悪に陥るを遮り給はんことを祈る。余  
の肉弱ければなり。

と始まる。

こうした心境は敢えて留学時に限らない面もあるが、家族と離れ  
た異国の生活であるだけに、矢内原は一層墮落の危険を惧れたもの

と解される（当時のイギリスに今のように性風俗が氾濫していたとも思われないが）。そして右の引用に続いて、その日の午前 British Museum で「Slope の小冊子 Wise Parenthood」<sup>(21)</sup>を読み、「此の書をよみたることを非常に後悔」している。それは内容が「避妊に関する説明」で（恐らくかなり具体的な記述だったのであろう）、しかもその日の午後「Handel の“Messiah”」を聞くことにしていたからだというのだが、それほど潔癖に心を清く保つことを心がけ、肉の誘惑などから身を律していたのである。<sup>(22)</sup>なおこの「メサイア」から受けた興奮は大抵ではなく、その日の記に歌詞を引用しつつ筋の展開と歌唱の様子とを二頁近くに互って記し、

終りし時は五時半なり。此の concert を聞くを得しは実に大なる幸福なり。帰宅後も心感激と愉快とに溢れて容易に眠られず。深く主の苦難と勝利について思へり。

愛子に今日の concert をしらしてやる。と結んでいる。

だから三月に再度これを聴いたときには、歌手と聴衆との態度について、

（前略） music は wonderful なり。然れども一月一日の時余は此の Concert を以て great worship, great service なりと思ひしが今日はその如き感を抱く能はざりき。余の隣りの婦人は絶えず Chocolate を口にせり。又 solists は聴衆の喝采に対し莞爾として

殊に女は姿態をつくりて答ふ。神はかくの如き群衆の中に在し給はずと思ひぬ。（三・25 〈Good Friday〉）と慨嘆している。

敬虔なキリスト者としての感想は、今までの叙述や引用からも明らかのように頻出するが、中で注意されるのは、牧師の説教や教会員の態度に対する不満・疑義である。例えばある日曜日、

（前略）例の如く教会。説教いつも物足りず、Bible を教へざるが故なり。今日の説教はエゼキエル書八章全体を読み而して其第十四節終り “there sat women weeping for Tammuz” なる一句を取り（中略）、我々の emotion 殊に十字架を仰ぎたる時の emotion は単に情のことに止らず heart より hand に及びて果を結ぶものならざるべからず、と言へり。その言ふこと悪しきにあらず空しき Sentimentalism の不可なることを力説する尤も可なり。然れども其為めに Ezekiel 八章全部を読む必要ありや、其第十四節を text とすること適当なりや。此章此節は「我の外何物をも神とすべからず」との律法を教ふるものなるは一読にして知らる。此章を text として vanity of emotion を説くは尠くとも聖書を教ふるものと言ふを得ず、而して聖書の解き明しの外我等は何の説教を為し得るや。人の言は市井に充ちたり、我等は神の言を聞く為め教会に集る。（二・6）

と記すごとくである。翌月見た映画 “Dawn of the World” についても、

「凡ての点に於て不満足にて見たることを大に後悔す。 Bible をよむ事にて足れり、否 Bible 以外の手段（活動写真の如き）にてその話を realise せんとするは悉く有害なりと思はる」（三・31）と述べている。あるいは「City Temple（注、Cromwell の Chaplain が創めたと次行に記す）の service に列」して、

（前略）説教は Atonement（注、キリストの贖罪）と吾人の new life とに就て語りしが例によりて肝腎の主の血しほの御贖に touch せず。何故に直截に単純に明白に彼（preacher＝原注）自身の信仰を述べて「証し」となざるやと思ひぬ。Lord's prayer を music となして choir が歌ふなど Cromwell 果して之を喜ぶべきや。（三・25）

と言ひ、続けて Hyde Park で

福音の伝道者を立ち聞さす。白髯の紳士 supernatural things を信ずる能はずとて盛んに interrupt す。惜しい哉伝道者は自分の話を面白く聞かせんとする様子なりし故その態度の真面目さに於て Naturalist（注、右の「白髯の紳士」）に一步を譲らざるを得ざりき。（三・25）

と書いている。その他、これに類しあるいは教会が民衆におもねるのを憤る記事（例、四・2。一・27の日曜劇場開場論もその延長）は少なくない。そうした感想・批判は、日本ですでに伝道に従事していた経験によるところが多いであろう。因みに、前後も引用しないと誤解を招きかねないが、「聖書知識が何だ、伝道が何だ、行為の

善悪が何だ、われらの心が信仰の喜びに溢れて居ること之こそ最も幸なことである」（四・10）との言もある。

教会員ないしは教会の運営に対する不満は、ロンドン・ベルリン各滞在中に一つずつ記されている。ロンドンでは（九・4）、ある集会に参加しようとしたところ、門前で主催者（Smith 氏）から、「聖書全体の inspiration を信ずるか等二三の質問を」受けた。煩を避けて要点を簡潔に示せば、それは彼が日本で知っている“brethren”として先日名を挙げた人（Mr. Brant）が「Old Testament の inspiration を信ぜぬ」からであったが、その仕打ちに対して矢内原は「余は Brant 氏の信仰によりてさばかれざるべし。余は余自身の信仰によりて立つなり」と言ひ、「余は故なくして余の信仰を疑はれたる気がして心中憤慨を禁ぜざりき」云々と書いている。しかし「Smith 氏が入りてよしと言ひし故腹の虫を押さへて席に列」なった上、

自らクリスチャンと名のりて集りに来れる者に対し試験の必要ありとするのは多くの偽りの信者が居るからだらう、慨嘆せざるを得んや。<sup>(23)</sup>

と憤っている。

前稿第五節の末尾に一言し、注27にふれたベルリンでの不快（十・16～23）も、右の Brant 氏の問題に起因している。すなわち、Empfehlungsbrief（＝recommendation letter）なしに集会に参加した矢内原は、集会后説教者たちに別室に呼ばれ、信仰や日常生活の正し



さを見極めた後でなければ「Gemeinde (= community, こゝは信者の集りすなわち交わり)に annehmen (= accept) する能はず」と言われた。彼等は矢内原が Brant 氏の知己であることを知っており、そして氏が「旧約聖書の inspiration を信ぜざる為め十年前(注、傍線原文)に Irlehrer (*lit.* wrong teacher, 邪教徒)として彼等の Gemeinde より排斥せられ」た(矢内原はそのことを晩初めて知った)人物だったからであった。

これに対して矢内原は、「彼等は余の交る者によりて余をさばかんとするものらしく」思う一方、「彼等の問ふに任せて日本に於て信仰に入り、信仰を学びし径路」や「余自身聖書の inspiration 聖書の doctrine 全部を信ずることと主イエスを救主として信ずること」を述べたのであるが、「三時間も語つて」も

彼等は尚余の言を信ぜず更に試験の必要ありといふ。何ぞ其愛と Goodwill とに欠けるや(注、数行前にも「尚彼等は余の誠の信者たることを認めず」云々とある)。

と、書いている。そして彼等が「君を信ぜざるにあらず、たゞ領解の困難は言語にあり」と言ったの対して、「然らず領解の困難は言語にあるにあらず愛の欠乏にあり」と割破している。

長くなるので以下は要点にとどめるが、彼は「争を好まざる故」彼等が再度問答すると言った次週も「来るべきを約して」帰宅した後、「余の信仰の告白が信用せられざりしこと入信後最初の経験として特にくやしくてたまらない」と書いた上、聖書の彼等が指摘した箇

所その他を読み、夜明けまで考えかつ祈っている(以上、十・16)。そしてその後、「彼等の Gemeinde に annehmen せらるること」への熱意の薄れた彼は次回に行くことを翻意し(16)、その旨主催者(Doppelstein 氏)に手紙で断る(20)。更に彼をその集会に紹介した人(Diehl 氏)が誤解を解きに来訪(22)、翌日 Doppelstein 氏から電話で「会談を希望せられ面白くもない思つたが和ぎを求むる愛の心に励まされて」訪問した。「Diehl 氏親切に余の為め、又余に対して語」つたが、結局偏狭な Doppelstein 氏とは理解し合うに至らず、「愛と信」と望と喜に就て語るのと異り非常に疲れ」て帰り、「余は益々彼等の中に annehmen せらるる必要なきを感ず」(23)と記して、この一件を終っている。

#### 四

家族特に妻愛子への思いも、日記の随所に横溢している。一年目の記事は前稿に指摘したが、二年目にも、「余は愛子及子供とはなれ来て一人他国にあり彼等を miss すること甚し」(二・14)、「愛子の手紙来り非常にうれしく感ず。封入の梅花未だ香りを保てり」(同・17)、「(前略) 愛子と共なる夢を見る」(同・23)のような、また

(前略、主として日本に遺した信仰の友の話題) 此外愛子より手紙四通領収(中略)。彼女が常に信仰を失はず益々信仰的態度の強くなること感謝の外なり。ああ余は愛子を愛せざるを得ず。よし彼女が余の妻にあらずとするも余は彼女を信仰の姉妹として

愛すべし、況んやこひしき我が妻たるをや。子供等の壮健なることを聞きて喜ぶ。(三・八)

のようなものが頻出し、特にその多くが信仰と結びつけて記されているのが印象的である。<sup>(24)</sup>

しかし愛子からの手紙は、必ずしも彼が期待するほど頻繁には来なかった。その原因は彼女が必ずしも毎日書かなかったのにもよるが、むしろ多くは船便の事情であろう。しかし矢内原はそれを、前稿に引用したが「彼女は余の手紙が行かざれば余に書かぬにはあらざるか」(九年十二・14)と言い、二年目にも初めは、

愛子より手紙の来らざること殆ど二週間、東京出發するとの四月六日附ハガキが最終なり。<sup>(25)</sup>金沢に帰りて疲労病臥せるにあらざやと一方ならず心配になる。愛子を一人で置いておく事は真に可はいさうなり。(後略、五・20)

十九日が日本よりの mail day なりしも遂に愛子の手紙来らず、尠からず彼女の健康につき心配になる。(同・21、22) <wedding day>、23にも同内容)

のように、案ずるだけで咎める口調はないが、次第に

(前略) 愛子よりは二月十日附手紙が大延着にて(中略)到着したる外四月六日以後のたより来らず。病気ならば病氣と言つてくれればよきに！心配と失望とにて不愉快なり。(五・31)

のように不安が焦燥になる。

実はその頃愛子は、彼が案じていた(右に引いた五・20など)よ

うに、健康を害していた。日記でそのことを記したのは六月二日の

あい子より四月十九日、五月一日、二日附手紙及二月十三日附(延着)、子供の雑誌等来る。彼女が胸部に疾患を得しことは実に可哀さうでもあり困つたことなれども神様は我等の信仰の鍛練を御始め下されしものと信じ心を強くして主にすがらねばならぬと感じたり。(後略)

が最初で、数日後には

(前略) 愛子に手紙出す。彼女の病気を心配す、poor wife! さぞ心淋しき事と察す。昨秋泰君死去の前後彼女が気管支にて臥床せりといふ事を聞いた時<sup>(26)</sup> 多分肺炎ならんと思ひしが此度肋膜との報を得て間違なく肺炎の初期ならんと推察す。彼女の兄弟より考ふれば不思議もなき事なれども今迄想像もせざりしこととて彼女を憐れむと共に余自身に対してもかなりの shock にして余の家庭の幸福は消失せりと思はる。How can I dare to kiss when she gets consumption! O horrid! 父母の歿後<sup>(27)</sup> 愛子を得て楽しみし人生の春も終りを告げたるか、実に「世」のたのしみは失せ行かんとす。妻の肺疾! Horrid!

あ、主よわが信仰を強め給へ。霊の喜びを我家庭に溢れしめ給へ。「艱難によりて信仰を鍛練する者には義の平康なる巢を結ばせたり(注、出典不明だが、ロマ書第五章第一〜二節にやや似た語がある)。(六・7)

と悲痛な語を記すに至る。結核(特に多かつたのが俗に肺病と言っ

た肺結核)が不治の病と恐れられた時代に、遠く異郷にあつて案じ苦しんだ矢内原の心中は察するに余りある。

そして八月末に、

あい子の健康が心配であるので今朝電報を打つて問合せた。可はいさうに病気が再発して弱つてるのであらう。二ヶ月も手紙を書けぬとは！或は余の帰朝期を待たず彼女は此世を去るのではないかと思つた。さう思つて非常にさみしく感じた(信仰と祈りの話題一行分略)。電報をうつてから(中略)領事館に行つたら七月二十日附のあい子からの手紙が来て居た。発熱及下痢の爲め長く病臥したといふ、其病状は本物の肺炎患者らしい、困つたものだ。主の憐憫を乞うた。(後略、八・29)

と記したが、四日後にその返電が届き、「愛子無事安心乞ふとの文言であつた」(九・2)。

その直後、大使館で「愛子より草野夫人(注、未詳)を経て転託せられし指環とネクタイピンとを受取」り「帰宅後箱をあけて見てうれしかつた。今夜から愛子の愛のこもりし指環をはめる。非常に豪華な感じす」(九・9)と喜んでゐるにも拘わらず、間もなくまた、

九月三日附愛子の手紙が来たが前便の八月十五日以来約三週間も無沙汰して僕の電報が行つたのでやつと申訳的に筆を取つた彼女の怠慢に対して腹が立つて仕様がなかつた。僕が愛子を思ふ程愛子が僕を思つて居ないことは事実だ。僕の手紙やハガキを受取り乍らその返事も出してくれないのだ。僕も愛子流に三週間も一

ヶ月も無沙汰してやらうかと思ふ。<sup>(28)</sup>(後略、十・13)

とか

(前略) あい子の手紙が一ヶ月に一度しか来ぬことは余にとりて非常に不足だ。心配もし面白くもなしどうして彼女は手紙を書いてくれぬのか知ら。余の手紙やハガキが沢山着いてるに違ひないが其返事も一々出してくれない。彼女にも何等か理由、弁解があるか知らぬが余は如何にしても解することが出来ない。<sup>(29)</sup>(後略、十一・18)

のような記述になつてくる。こうした不満は、妻子と離れた異国暮りでは十分抱き得ること、夏目漱石の場合にも見たところであるが、矢内原の日記はその吐露が特に詳しい。少なくともこの頃の彼は、感情の起伏がかなり激しかったのであらう。

その後はやはり病状に配慮したのか、

伯林到着(注、九月十三日)後出したる手紙の返事が千代(注、下の妹。この直後門田武雄が求婚)、啓太郎(注、末弟)其他より来てうれしかつた。あい子からは一つも来ないので失望した。何故彼女はこんなに手紙をくれぬのか?と思ふと心が重くなつてしまふ。(十二・14)

と、以前のような立腹は抑えているが不安と不満はまぎれもなく、年末にも

(前略) 愛子より手紙が来た、あまり彼女からの手紙が来ぬので憤慨してやつた余の手紙に対する返事だ。「今は何も言ひません<sup>(30)</sup>

……唯祈つて居ます」之が日本婦人の淑徳かも知れぬが余にははがゆくて仕方がない。思ふ事をハキハキと言つてくれる方が大分よい。そして百の心の思ひよりも一の実行にあらはるる愛を欲す。

(十二・30)

と記している。

現在見る日記はこの翌日(大晦日)で終っているが、翌十一年にトリエステ・フィレンツェ・エルサレム・ベルリンなどから伊作や愛子に出した便り(四ノ十一月とびとび、すべて絵葉書)には、今までのような不満や不安も見えない代り、妻の病状を案ずる語もない。小康を得ていたのか不吉な話題を避けたのか(恐らくその両方であろう)。そして留学期間を延長されてアメリカを横断した最後の年(大正十二年)は、全集を見る限り書簡類も現存せず、家族との交信や愛子の病状を知ることできないが、その間に愛子は東京信濃町の慶応病院に移っていた。そして二月九日(31)に横浜に上陸した矢内原は、直ちに同病院に駆けつけたのであった(以上、「全集」第二十九巻の「年譜」による。以下も同じ)。

こうして約二年半ぶりに再会を果たせたものの、愛子はその喜びに緊張の糸が切れたか、半月余り後の二十六日未明、遂に世を去った。矢内原の悲嘆思いやるべく、これは留学日記の記事外であるが、一瞥しておく。

## 五

以上の他にも、矢内原の留学日記は話題に富んでいる。長くなるので、以下は簡略に止めるが、一つは民衆や子供を観察した記事で、二年目の聖霊降臨祭に

Bank holiday. 汽車休憩につき bus にて Hamstead Heath に行き

縁日気分を視察す。Merry-go-round; swinging; dart-throw; coconut shoot; 押すな押すな の賑ひ我國の縁日と異ならず。土地は道灌山の様な処にて St. Paul's や Tower Bridge も見え眺望絶佳なり、少し離れたる処にて雑踏も余所に一群の羊が静かに草をはめると、二組の男女が草に臥して例の通りかたく抱擁し、沢山の人が其附近にて之を眺めるともなく眺めずともなく弁当など食べて居りたるとは日本で見られぬ図なり。余は一群の羊を好み二組の男女を好まず。午後は dancing が始まることなりしも早く帰途につきて見ず。貧乏人の子供が penny を投じて merry-go-round やブランコにて楽しく遊んでる様は美しかりき。(五・16、この次の段落で Wisunday の墮落を嘆いている)

とあり、また翌月の或る日曜にも

教会は Sunday School Anniversary Meeting にて boys & girls 前に集りて歌ひたり。forest や Common で男と一しよに寝ころがる様になりしはいやらしけれど十三三歳以下の女の子は実に可いらしい。(六・26)

とある。当時の日本人にはある程度普通の倫理観であろうが、矢内

原は特に潔癖と言えよう。なお井上（前稿注21参照）の家で「日本食の御馳走に」なった日（七・一）、「赤ん坊実に可愛らしい」と書いている。

異国での下宿暮らしでは、食事に関心が向くのも自然で、この日記にもそうした話題は折々見える。例えばロンドンの下宿の食事について

本日此家にて始めてスープが出る。（二・六）

（前略）昨夜も今夜もスープあり、何だか世界が変わった様な気持です。その代り cold meat なり。（二・八）

とあり、また昼は当然外食だが

（前略）昼飯の oyster stew 非常にうまかりき。方針をかへて明日より昼飯にはうまいものを三志以内にて食ふことにしよう。

（三・11）

（前略）昼飯は有名なる都亭にてうなぎの蒲焼を食うて好奇心を満足さす、（後略、六・24、前稿にこれに続く勘定のことまでを引く）

のような愉快な記事もある。

ロンドンでもベルリンでも、留学生同士が折々会って食事や歓談を共にしているのは他の留学日記と同様だが、その中で

（前略）今日は多くの手紙を日本より受取りたり、（中略）上野君<sup>(32)</sup>は相変らず大学の現況に憤慨、不平にて満ちたり、河合（注、栄

治郎）君の超然的態度と好一對なり。（三・8、ロンドン時代）とか

午后舞出（注、長五郎、前稿注24参照）が来て Russia の飢饉救済の為に独日本有志から寄附金をまとめて送る計画ありとの事にて賛成をしておいた。それから矢作先生<sup>(33)</sup>始め学校の同僚達の月旦が例の如くあり。それから夕方一緒に市中へ Cafe をのみに行きその途中電車の中にて伊藤白蓮女史が宮崎竜介君と恋して家出したとの話に関し一夫一婦の大議論をした。舞出の思想は言ふ迄もなく唯物史観に基くものとして経済の状況の変遷と共に結婚道徳も変わるものだから一夫一婦といふ固定的の道徳は認めることが出来ぬとか、Liebe がなくなれば結婚生活を破毀するも止むを得ぬとか言つたから「君が結婚後（注、舞出はこの時まで独身）妻君に捨てられぬ様用心したまへ」と意地悪を言つておいた。（後略、十一・14、ベルリン時代）

とかは愉快である。

矢内原は経済学者といつても植民政策を専攻していて、現実社会の経済動向については関心が薄かったのか、前稿（第五節後半）に指摘した英独両国の商法の違いに言及したところはあるが、当時（第一次大戦後）のドイツを襲ったインフレについては、現存の日記では言及していないようである。<sup>(34)</sup> 金銭に細かい彼としては意外なようでもあるが、関心の持ち方は人それぞれなのであろう。

また、当時成立したばかりの国際聯盟について、ロンドンの Hyde

Parkでその「大 demonstration」を見て、

(前略) League of Nations は good ideal なるも世界の平和が演説  
や行列や dancing を以て来らざることを丈は明瞭なり。罪人の心を  
神に帰らすこと以外に平和実現の手段なし。(後略、六・25)  
とも言っている。

以上、矢内原忠雄が留学期間の前半一年余に互って記した日記か  
ら、注意すべき事項を拾ってみた。「美しき卯月一日なり。梨の花到  
る処に満開なり。但し桜花の美に如かず」(四・一)とか、「日本皇  
太子(注、後の昭和天皇)御入京」を「御歓迎申上げたり」(五・9、  
13)、ロンドンの動物園で「rhinoceros (注、犀)を見て驚き」、「Lion  
が dignity, sovereignty を表はすことせば rhinoceros は strength を表はす  
ものと感じた」(七・7)など、まだ拾いたい記事もあるが、長くな  
るので一応ここで打ち切ることとする。

注

- (1) バラッド・オペラの最初とされるイギリスの劇作家ゲイ John Gay (1685 洗礼  
— 1732) がドイツ出身の作曲家ペーブッシュ Johann Christoph Pepusch (1667  
— 1752) の協力で作した「乞食オペラ The Beggar's Opera」であろう。春秋  
社『音楽大事典』によれば「ロンドンの下層の人々を主人公にし、民衆に親  
しまれた旋律をふんだんに採り入れ」て、長く人気を博したという。
- (2) Concert とあるが実はオペラと考えられる。「中人後は Samson in the prison  
of Gaza 及び Banquet of Philistines の二場にて」とか、「家倒れて Chorus の  
Ah なる悲鳴」、「Samson は神を信じて柱を揺りたり」とかがその証である。  
ただ、このオペラは本来三幕物で右に「中人後」という二つの場は第三幕の  
第一・二場であるが、このときは第一・二幕を通して上演したのであろうか。  
なお後文参照。
- (3) 本文の批評に「何等の principle なき寄せ集めにて、感覺的にて、享樂的に  
て、軽薄なる、現代文明の如し。実につまらず、見て後悔す。dance はどうし  
ても感心出来ず」とある。この前年に発足した国際連盟の議事か何かの行為  
かに取材した、一種の時局もの(むしろ際物)で、大正三年九月に穂積重遠  
がロンドンで観た茶番「欧州大戦無言劇」のようなものではあるまいか。な  
お、この「欧州大戦無言劇」については、「穂積重遠の「欧米留学日記」と  
「独英観劇日記」(ICU『人文科学研究キリスト教と文化』第三一号、二〇  
〇〇・三)にふれた。
- (4) ユダス・マカベウス(「マカベウスのユダ」の意)。ヘンデルのオラトリオの  
一つ。三幕から成り、その第三幕の合唱「見よ、勇者は帰る See the  
conquering hero comes」の旋律はスポーツの優勝者表彰の際にしばしば演奏さ  
れる。前引『音楽大事典』に「第一マカベア書、ヨセフスヘユダヤ古誌」第  
一二巻に基づく(原文横書、算用数字)とある。なお、右の二書は今ほそれ  
ぞれ「マカバイ記」「ユダヤ古代誌」というのが普通。
- (5) 本文の年譜に引いた部分に続けて、「Play なれども非常の改悪にて原作の  
妙味を殆ど存せず。(後略)」とある。後略部分では人物の性格・行動が原作と

- 異なり、また筋の設定にも問題があることを指摘して、「Goldsmith は真の人生を描けるに對し此の play は conventional なる人生の見方をして居る。(中略) 之では Goldsmith に氣の毒だ」と評している。なお、この劇を見るに先立って(恐らく切符を入手して)、原作を読んでいる(四・13読了)。
- (6) 正式題名は *Songs of Hiawatha* (ハイアワサの歌) か。Longfellow の *The Song of Hiawatha* (インディアン伝説の英雄伝説に基づいて創作した二十二歌からなる長篇叙事詩。ドボルザークの交響曲「新世界より」にも影響を与えた。『世界文芸大事典』によれば「カレワラ」の韻律を借りたという) を基にした管絃樂のための三連作で、イギリスの作曲家コルリッジ・テラー Samuel Coleridge Taylor (1875-1912) 作曲(以上、前引『音楽大事典』)。この切符を入手したからか、この月十九・二十日の両日で原作を通読している。
- (7) 前記『音楽大事典』は Moiseevich と綴る。ロシア(オデッサ)生まれのピアニストで、一九〇八年イギリスに移り、翌年ロンドンでデビュー。一九二七年初来日、日本でもよく知られた演奏家。一九三七年イギリスに帰化、一九六三年没。
- (8) この前に「Kronprinzpalas に行き」とあるが、Kronz の z は符字(誤植か)、また Nationalgalerie (今は「新ナショナルギャラリー Neue Nationalgalerie」という)は通常一語でそれと東宮御所とは全く別(Unter den Linden の終点 Schlossbrücke を中心に点対称の位置)だから、「Kronprinzpalas に行き」というのは、単に行程を記したものに過ぎない。
- (9) 原文には Friedrich Wilhelm Museum とあるが、Wilhelm は英語と混同した誤記と思われ、かつ博物館名としてはこれはつけず、次行(十・31)引用のように Kaiser Friedrich Museum と書いた(ペデカなど)。なお、これは今のポーデ博物館 Bodemuseum である。  
そして十月三十一日の条には、「今日は Rembrandt の画を注意して見た。又 Canach の宗教画が奇妙であつた」とある。
- (10) その日の記に「Haydn, Beethoven とも一つ近代の非常に面白いものがあつた」に続けて、「ベルリンに来てからは一向芝居や音楽会に遠ざかつて居る。今日が始めてであつた。その理由はベルリンには London と異り Matinée が日曜以外には殆ど皆無なること、及び Hanna のために真に慰められて居るからだ」とある。
- (11) 今もこの名。一八二〇年代に建てられた。矢内原は「独乙は遅くから勃興した国でよくこんなを集めたものだといつても乍ら感心す」と書いている。
- (12) この劇場名は当時のガイドブック(ペデカなど)に見えないが、Staatsoper (国立歌劇場)と通称する Opernhaus (今も同じ位置にあり、Deutsche Staatsoper と称する)であろう。なおオペラ「ミニオン」は、大正二年四月に穂積重遠も「王立歌劇場」(これも恐らく Staatsoper)で観ている(注3に挙げた拙稿にふれた)。
- (13) 日記に見る阿部次郎の留学生活の中で、その美術館見学については、「文学者の留学日記大正篇—阿部次郎(続篇)と小宮豊隆—」(ICU『人文科学研究キリスト教と文化』第二八号、一九九七・三二)に考察した。
- (14) 少し長くなるが、興味深いのでその部分の原文を引いておく。  
今の留學する人はなかなかよく勉強するけれども、僕らの時代の留學生には三種のタイプがありまして、一つはコチコチになって自分の専門を勉強してくる人。それから、自分の専門は日本に帰つたら勉強できるというので、できるだけ視野を広くし、まあ、今の言葉では教養を積む—最高裁の田中耕太郎君(注、矢内原はロンドン滞在中にしばしば彼と会い、キリスト者の集まりで同席もしている)はそれで、ピアノを習つたりして、ヨーロッパ滞在の時間を使った(注、田中は「大正八—一〇年の留學中に赴いた南欧・パレスチナでの日記を戦後『南欧芸術紀行』へ文芸春秋新社・昭二七」として刊行した)。それからもう一種は、専門の勉強もしなければ教養も積まない。ただ遊んでくるといふ種類のタイプの人たちです。舞出長五郎(注、前稿注24参照)といふのは第一種の人なので、よく勉強したんです。本を読みましたね。僕はむしろ第二種の方でね。しかしたけなりましたね。僕は田中君ほどでないが、音楽について、絵画、彫刻、美術について、それから思想ですね。思想とか、社会運動とか、そういうものについて興味を開かれたのはその貴重な留學の期間です。だからそういう暮し方もそう悪くない……。

美術史家の三輪福松氏は「矢内原先生と美術」(『全集』月報21(一九六四・一一)、「矢内原忠雄―信仰・学問・生涯―」(以下、副題略)に再録)で「矢内原先生は本当に美術がお好きだった」と、その証となる挿話を記しているが、この趣味も右の次第で開発あるいは増幅されたものではあるまいか。

なお、大内兵衛は前稿注25に挙げた追悼文「赤い落日」(初出は『世界』昭三七・三)に、

留学中わたくしはベルリンで彼に会った。彼は普通の留学生のようにアクセクとドイツの大学の講義などは聞いていなかった。それよりも下層の社会を見たり聖書をよんだり画を見てまわったりしていた。そこで、先輩と同僚のうちには「矢内原はあれで経済学の講義ができるか」といふらすものさえあったが、さて、講義がはじまると、学生は矢内原先生の学説の新味と重厚さにおどろいた。そして「植民政策」は直ちに大経済学部の名物となった。事実、彼は毎日朝から晩まで研究室に立てこもって熱心に講義案を作ったばかりでなく、実に多くの専門の論文を次々に発表した。(後略)

と言っている。

- (15) 「真夏の夜の夢」の感想(二・21)にも、「実に delightful comedy なり。Reason と Love との互に手を携ふべきを教ふ。Hernia が Lysander に対し bachelor と virgin との神聖の為に離れて眠るべきを protest する処彼の “Wandering Jew” 劇天幕の場と雲泥の差ありといふべし」とある。なお、“Wandering Jew” 劇とごうのはフランス十九世紀前半の作家シュエ Eugene Sue の新聞連載大衆小説 *Le Juif errant* を脚色したものであろう。「劇化(一八四九)されて大当たりとった」(東京堂『フランス文学事典』、小林路易氏執筆。原文横書・算用数字)という。

またベルリンの下宿で、メイドの一人イダの誕生日に「夜友人十五六名の Gesellschaft (注、仲間の意)」に加へられて一緒に飯をたべたが独乙名物なれどもビールをのんで酔心地の男も出来るし、あれで Göttliche Lieder (注、直訳すれば godly songs、讚美歌のことか)が歌へたりするものでない。不愉快を感じた(十・9)と記している。

- (16) これに続けて「此部分が全曲中最も重要なるは明白なり」と言っているから、題材や筋は旧約聖書ですでに熟知していたとしても、初めて見たに違いない(日本初演は太田黒元雄『歌劇大辞典』によれば昭和二年露国大歌劇団)このオペラの、構成や見所を把握する理解力もあったことが知られる。

- (17) この語は本来「ナザレ人」の意だが、ある段階からヘブライ語で似た綴りの「ナジル人 Nazirite」(聖別された人々でサムソンもその一人)の意にも用いられ、ここはその意(高木久夫氏の示唆により、『キリスト教大辞典』等を検索して知った)。

- (18) 藤井氏は「音痴」と書いているが、一高の寮で同室の石井満氏(後に精華学園名誉園長)は矢内原が図書館から夜戻るときの寮歌について、矢内原家の日曜集会のメンバーでもあった市田米子氏は山中湖畔での講習会夕食後の讚美歌について、また次男光雄氏は「矢内原が(ご機嫌のよい朝)歌った「一高の寮歌など」について、それぞれ「矢内原君と僕」(『全集』月報29(一九六五・七)、「山中湖畔に於ける矢内原忠雄先生」(同月報9(一九六三・一一)、「父」(同29、母堂恵子氏の語を引用して)に(いずれも前記「矢内原忠雄」再録)、それを裏づける証言を記している。

しかし藤井氏も言うように歌うことも聞くことも好きで、留学中も折々一人讚美歌を口ずさんでいる(例えば五・29)し、前稿第五節に引用したベルリンの下宿でのホームパーティー(十一・16)でも歌を楽しんでいる。更に昭和三十年前後に東大教養学部学生課長であった西村秀夫氏の「教育者としての先生」(前記月報21(一九六四・一一)、「矢内原忠雄」再録)によれば、昭和三十三年日本学生奉仕団主催の第三回セミナー(於御殿場東山荘)では、「食後の余興に(中略)罰として歌を課された時には、一高の寮歌「芸文の花」を独唱された」という。因みに「芸文の花」は、明治四十三年一高第二十回記念祭の折の東大寄贈歌で、詞も曲も格調高い名曲。旧制末期、これを歌いたいがために一高を受験して何年も浪人したという人のことを聞いたことがある。

寮歌と言えは矢内原の初期の文章「一高を去る前に」(神戸一中校友会『会誌』第二十七号II大二・六、『全集』第二十七巻の「学生時代の文章」に収め



る)の新渡部校長送別会の条には、「新渡部校長惜別歌」(一高の『寮歌集』によれば石井満作詞、亀井貫一郎作曲)の楽譜と全歌詞とを記している。

なお、矢内原は東大教養学部部長時代(昭和二四・五―二六・一二)に、学生がコンパで旧制高校の寮歌を次々と歌い(当時新制東大には旧制一年修了の学生もいたし、昭和二十六年入学理科二類独語既習の筆者のクラスなどには医学部志望の旧制高校卒業者(浪人)もかなりいて、その通りであった)、それが終わる(種切れになる)と「インターナショナル」を歌うのを耳にして、学生たちに「健全な歌」を与える必要を感じ、「学生歌」を募集することを思いついた。これはその結果採用制定された学生歌の一つ「足音を高めよ」(昭和二十八年度入選歌、平井富夫作詞・末広恭雄作曲)の発表会(於安田講堂)で、当時総長の矢内原自身が語ったことである。これらのことから、彼は巧拙は別として、藤井氏の言う通り、歌は好きであったと見てよい。

(19) この一週間余り前(八・11)にも、エディンバラ郊外で「motor-charabanc 旅行(注、今で言うバスツアー)に加はり」、「St. Mary's Loch, Yarrow dale」その他を見学した際、「Wordsworthの詩にて聞き及びし Yarrowの流れも今日こそ見たれ。但し英人には Sir Walter Scott 一点張りにて此国は彼の名を取りて Scotland と命名せられたかと思ふ位だ。その Sir W. Scott の住みし Abbey……<sup>(17)</sup>といふ宏壮な建物を車から見た」と記している。因みに、この前にも「Carlyleの旧居」や「Danie Gabriel Rossetti の旧 studio」(五・18)、Burnsの生家(七・25)などを訪ねている。

尤も、遺跡への関心は文学者だけでなく、その前日(八・10)はスコットランドの宗教改革者 John Knox の家や墓、そして「経済学者 Adam Smith の墓を(天折の詩人 Robert Fergusson)の墓とともに)訪ね、翌日(八・12)には戦争で「Lesley 將軍の陣せ」Downの丘に」上っている。なお、やや不思議なことに、「Adam Smith の墓の此処にあること余は知らざりしも昨日住友の人が此処を訪ねんとして居たるにより始めて知りしなり」とある。Fergusson は一七五〇―一七四四、R・バーンスに影響を与えた(*The Oxford Companion to Literature*)。Lesley は David (1601-82) スコットランドの軍人で伯父 Alexander に従って三十年戦争に従軍後、イギリス議会議会軍を助けて戦っ

たがチャールズ一世処刑後は王党に転じ、ダンバーにクロンウエルと戦って敗れた(一六五〇)事蹟がある。

(20) なお前稿にもふれたが、前年十二月九日に Toynbee Hall で壁面の説明から、「嘗て感激を以て」<sup>(18)</sup>読んだ Tom Brown's School-days と「Titanic 沈没の記事」とを思い出している。ここでこの二つが脳裏に浮かんだのは、隣りの St. Jude's Church の牧師とその妻 Lilian がタイタニックの遭難の犠牲となったこと(その折、リリアンはボートの空席を勧められたが夫の傍を離れないと辞退した)、そして彼女は「トム・ブラウン」の作者 Thomas Hughes の娘であったと記されていたからである。それを読んだ矢内原は長文の日記の一節に、

Thomas Hughes を教へし Dr. Arnold (注、これはモデルと作中人物の混同)の温容眼前にある如く沈み行く Titanic 号の食堂より響ける「Nearer My God to Thee」(注、「主よみもとに近づかん)のさんびか耳底に聞ゆるが如し。

と記している。因みに、岩波文庫(昭二七)の「解題」(上巻末、訳者前川俊一氏)も著者(注、「作者」の意)は自分と小説の主人公トム・ブラウンとを同一視されることを甚だ迷惑がつて、両者の間に何の関係もないことを本書の後篇『オクスフォードのトム・ブラウン』の序文の中でも明言しているが、読者がトム・ブラウンの中に、ある程度トマス・ヒューズの面影を読み取るのは不可避のことであらう。

(21) 著者は Stopes が正しい(前稿注23参照)。またこの書名は全集に *wise Parenthood* とあるのを、誤植と見て改めた。

(22) 他にも余は聖人にあらず。余は知らず知らず己が情慾の妄想に耽れるを見出す、ああ主よわが為めに墻となり給へ。我を試誘に遇はし給ふ勿れ、若しわれ今積極的の誘惑に会はんか主の道を踏みあやまらんことを怖る。(一・16) という条もある。

尤も少し後には、

Hall とらふ人の “Knowledge of Sex” を借りてよむ。人体の構造、作用を知るは実に面白し。Secretion (注、分泌あるいは分泌物の意。ここは sperm の意か) について知識を得たり。(三・22)

という記事もある。しかし一方、ベルリンに移ってから、具体的なことは判らないが、

午後はよほど危き淵まで悪魔の為に誘はれた。然り余は神の前に大なる罪を犯した！ 神は余の良心を刺戟して墮落を最後の瞬間に防ぎ給ひしと雖も余の心に於ては実に大なる罪を犯した。(九・17、Nationalgalerie を見た記事に続いて)

といった告白がある。

(23) 「日記」を読む限り、ここは主催者側がやや偏狭で矢内原の怒りも尤もと思われるが、一方で矢内原が不正・不合理や無礼、不適切な言動に対して峻厳だったことはよく知られており、矢内原学部長時代に東大教養学部居た竹山道雄(私が接した面)、『全集』月報22(一九六四・一二)、『矢内原忠雄』再録)・淡野安太郎(「毅然とした態度と学問に対する情熱」、同月報27(一九六五・五)、同書再録)・朱牟田夏雄(「毅然たる信念の人」(同書)などの諸氏も、そのことを述べている。特に後二氏は昭和二十五年秋(矢内原の教養学部長在任中)の「いわゆるレッドパージ反対試験ホイコット事件のとき」の彼の行動にふれている(ついでながら、駒場の通称「矢内原門」もその結果の産物と聞いている)。

また総長在任中に或るマスコミが、世間の東大偏重の弊について意見を求めようとして「東大病をどう思いますか」と尋ねたとき、言下に「何を言うか！ 東大は病気ではない」と答えた(筆者の記憶する新聞記事)こと、同じ頃東大学力増進会というサークルが本郷キャンパスの教室で日曜日に中学生の希望者を対象として一種の課外授業をしていたが、その生徒がふざけて投げたチョーク片が銀杏並木を歩く彼の脳天に命中して彼を怒らせ、以来中学生対象の講習は学内ではできなくなった(これは高校生を対象に同様な活動をしていた東大学生文化指導会で昭和三十年前後に筆者が聞いたところ

であつて真偽は保証の限りでないが、彼に対するわれわれのイメージからは信憑性があり、事実当時われわれ文化指導会は法文経の教室を使っていたが学力増進会はキャンパスの外で活動していた) ことなども、その例と言えるかも知れない。

「留学日記」の中には、

Tube (注、ロンドンの地下鉄) の三ヶ月の pass を求めることを前の土曜日に apply し昨日、今日、度々尋ねしも交附を受けざりしを以て遂に肝癪を起し申込を取消す。天気よき時は bus にて通ふこととす。(三・15)

という一件がある。

(24) これより前、一月にも

(前略) 主の余に対する愛は実に大なり。しかも余は妻を思ふほど度々主を思ふや、妻を思ふ程熱烈に主を恋ふるや。(後略、一・22)

と反省する一方、

午前教会、午後 Epping の森を散歩す。途に会ふもの大半は腕を擁したる男女一組なり。而して余の許には愛子より手紙来らざること約四週間。いやになりて帰る。(中略、ここに前引の「余は聖人にあらず」の段落がある)

われ慰めを愛子の手紙に期待すべからず、彼女も人なれば人に望をつなぐべからず。われは一人神と共に立たざるべからず。神に教へられ慰められ強められざるべからず。(後略、一・16)

のような語も見え、四月には「愛子に手紙出し Christian-like, wife-like にあらざる点をいましむ」(四・21) のような記事もある。また、

二月十八日附の愛子の手紙来る。彼女オルガン、バイオリン、声楽、琴並に英語を稽古しつゝ、ありといふ。好きの道とはいへ余り気が多すぎる。寧ろ一つ二つに止め一人前以上の域に迄その art を進歩せしむるを wise なりとせん。余はオルガンの熟達を彼女に最も希望す。且つ彼女が此の留守の間に housekeeper として必要なる practical art (management, cooking 等) を習熟すること及地理歴史博物に関する common knowledge を習熟することを最も希望す、之れ彼女に最もかけたる処にして而かも

長く家族を睦しく happy のものたらしむるには此の二つは欠くべからざる要件たればなり。(三・30)

のような、やや愉快なものもある。

(25) 「日記」五月九日の条に「愛子より悦子、千代子(注、二人とも矢内原の妹)と三人でうつしたる一時間写真(注、今で言えばスピード写真のようなものかと思うが、具体的にどのようなものか、富士フィルムでフジカラーを開発した友人に質し、彼は更に先輩にも当たってくれたが、不明とのことであった)のエハガキ送り来る。(後略)」とあるのが対応すると思われる。その前々日(七日)には「愛子より三月三十一日附ハガキ二枚、三月二十八日、三十日、四月二日、四日附四つの手紙受領」とある。

ただ、そこで愛子が「東京出発する」と書いたのはどういう意味か、不審が残る。次の文への続きからは「金沢へと」東京を出発する」と取りたく、また「東京へと出発する」と取れないこともないが、どちらも事実には合わないように思われる。『全集』第二十九巻に収められた書簡による限り、留學中の矢内原が家族(愛子または伊作)に宛てた書簡は、この前後もすべて金沢の西永(注、愛子の実家)方に出されているからである。

(26) このこと(愛子の臥床)は、これ以前の日記の文面や『全集』に収められた書簡には記されていない。ただ、この年一月(すなわち、この記事より五箇月前)八日の愛子宛書簡に

お前の手紙がもう大方二十日も来ないが病気で居たのではないか、或は泰ちやん(注、愛子の弟と思われる)が非常にわるかつたか、何しろあまり手紙が来ないから心配して居る。

とある。そして十余日後の日記に

遂に愛子よりの手紙(十二月十四日附)来る。泰君昨年十一月二十九日死去とのことなり。彼遂に主を信ぜずして逝く、悲しむべし。(中略)愛子はたましひ及肉体の全力を尽して泰君の介抱に従事したる如し、彼女の悲しみ同情すべし、(中略)西永両親の心泰君の死によりて如何ばかり痛手を負ひしやらん。(後略、一・19。中略・後略部分は信仰の語)

と記されている。これで見ると、本文に引いた六月七日の条の「昨秋」は

「泰君死去、臥床せり」のみにかかり、「聞いた」にはかからないことが判る。

なお「肺炎」は「肺炎カタル」の略で、肺結核の初期の病変とされた。「肋膜炎」は「肋膜炎」(ここは結核性の)の略で、結核の初期に多い症状。因みに「肋膜炎」は今の医学では「胸膜炎」と言うのが普通。

(27) 矢内原の父(謙二)は大正二年十月(東大入学直後、因みに当時は九月新學年)六十一歳で没、母(松枝)はその前年(明治四十五年)三月(一高二年)に在學中で二期の試験直前)四十歳で没。共に臨終に間に合わなかったことなどは日記にも詳しく記されており、特に母の思い出は「おのれを語る」「私の人生遍歴」(共に『全集』第二十六巻所収)に、またその危篤の電報で新橋駅へ駆けつけたとき石井満氏(注18参照)が見送ってくれたことは「石井満君と私」(『全集』第二十五巻の「交友」に収める)に述べられている。

(28) 以下、「けれども悪に報ゆるに悪を以てする勿れ」といふ聖句(注、ペテロの前の書第三章第九節、但し原文通りではない)が思ひ出されて少くとも一週一度は手紙を書いてやる」ことにするが、「今日は腹にこらへ兼ねて機嫌をわるくしたのだから手紙を持つて来てくれた」メイドの Hanna(前稿注27等参照)を心配させる。そして「愛子は三週間も手紙をくれなんだと言ったら」彼女は驚いたが、「併し仕事が多くて忙しかつたのだらうから」淋しいだろうが怒らないでと言うので、

僕も zart(= delicate)な Hanna に免じ又聖書の誠めを想起して立腹は止めて愛子に返事を書いたが、やつぱり不足がましい手紙になつて仕舞つた。

と書いている。更に「愛子からは又々半月余も文通なし、あんまりだ。僕からも彼女の手紙来る迄通信してやらぬ」(十一・4、實際は次に一部を引く十八日に二通出している)と書いた日もある。

(29) 以後この日の記事は、

僕の最も怖るるは余が度々通信しそして愛子に対して少くとも一週一回の regelmässig(= regular)なる通信を懇願せるに拘らず、斯の如く彼女が手紙を怠り一ヶ月一回といふ様なことにていつもそれを面白からず思ひ居るままにて余が帰朝すれば、其時我等の愛は深く強きものであり得るかといふ点にある。(中略)彼女がこんなに手紙を怠ることは愛の冷却、

少くとも忠実の欠乏としか余には思へぬ。

以下延々と続き、

病気のせいかしら、或はあまり手紙を書くに僕が Heimweh (= Homesick) になるだらうという同情心(?) からかしら、或は自分が余計にさみしくなつて苦しいといふのか知ら、どれも手紙を一ヶ月も怠る理由にならぬ。子供が何をして遊んでるか、自分が何をして暮して居るか、愛さへあれば毎日でも手紙を書く材料はある筈だ。

更に「余は婦朝の節唯愛と感謝とのみ有ることを希望するから、今後の一年間は是非とも一週一回の規則正しき通信を怠らぬ様更に更に念を入れて今度の手紙に言つてやつた」とあり、

今後あまり彼女の事を心にかけて手紙も一月に一度位にしようかと思ふ事も再三なれども、余にはそれを実行するだけの勇氣なし。愛が愛を以て答へらるる時大なる喜あれども、愛が愛を以て強く答へられざる時は又特別の苦痛がある。

とまで言っている。妻からの来信が少し速のいた(しかも後述のように、妻が病床にあることも五箇月前に知っている)だけで少し大袈裟ではないかというの第三者の言うことで、当時の矢内原の心中は、まさにこの通りだったのである。

(30) 十一月六日にベルリンから出した絵葉書(全集所収)を指すのであろう。「(前略)お前からの手紙が又々二十日も来ないので如何して暮して居るかと思つて居る。(中略)手紙をくれなければいかんよ(後略)」とある。

(31) 前年十一月二十五日に(本文次行にも記す「年譜」による)留学期間を三月三日まで延期を許されたのに一箇月近く早めて帰国したのは、船便(太平洋航路は月に一、二便は運行していたのではあるまいか)の都合というよりは、妻の病状を案じてのことであつたと思われる。

(32) 上野道輔。会計学者。明治四十五年東大法科大学卒。大正二、六年英・独・米に留学、帰国後東大(法科)助教授。同八年創設された経済学部に移り、同年中に教授(『帝国大学出身名鑑』・平凡社『大人名辞典』等による)。矢内原よりは五年先輩だが、同僚を(それが先輩でも)君(くん)づけで呼ぶの

は当時普通であつた。また彼が「憤慨」している「大学の現況」とは、主として大正八、九年の森戸事件に関することであろう。

(33) 矢作栄蔵。農業経済学者。明治二十八年東大法科大学政治学科卒。同三十四年東大農科大学助教授、三十六年独・英・伊・瑞(注、スイスカ)に留学、帰国後農科大学並びに法科大学教授、大正八年経済学部独立に伴い同学部教授(農学部教授兼任)、同十二年学部長。退官後も帝国農会その他の会長を務め、わが国農業経済学界に寄与するところ大であつた(『大人名辞典』等による)。

(34) ただ書簡では、大正十年十一月六日にベルリンから妻愛子に出した絵葉書に、

(前略)独乙ではマルクの相場がドン／＼下る、物価は上るで我々外国人には結構だが独乙人には非常な苦痛で気毒だ、全く戦勝国はみじめなものだ、(後略)

という、かつて紹介した(前稿注22参照)小宮と共通する感想がある。